

## 囚人のジレンマ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「取引しよう。おまえが自白して相棒の罪について証言したら、相棒は10年の刑、おまえは無罪放免にしてやる」。ゴードンは、どのみちナイフを所持していた罪で警察がふたりに1年の刑を科すことができるのを知っていました。でも、強盗の罪を立証する証拠はまだあがっていません。ここでむずかしいのは、となりの部屋ではトニーも同じ取引をもちかけられているとわかっていることです。そして、ふたりとも自白して相手を有罪にした場合は、どちらも5年の刑を食らうことになるのです。トニーがどうするか、わかればいいのですが。

ゴードンも馬鹿ではありません。彼は選択肢を慎重に天秤にかけます。「トニーが黙秘することにしたら、こっちはあいつのことを密告したほうがいい。トニーは10年の刑、こっちは自由の身だ。逆に、トニーが俺のことをチクるとしても、やっぱり自白して、あいつのことを話せば、5年の刑ですむ。でも反対に、こっちが黙秘したら、10年の刑を食らうはめになる。どっちにしる、こっちは自白したほうがよい」

ゴードンにとって問題なのは、トニーも馬鹿ではないので、まったく同じ結論に達するということ。結局、ふたりはお互いの罪を告白し、ともに5年の刑を言い渡されます。ふたりとも黙秘していたら、たった1年で出られたのに】(『知っている人生に必要な哲学』)

この囚人のジレンマ、バスケットボールにもあらわれる。例えばコミュニケーション。

チームには声を出す選手と声を出せない選手がいる。声をかけあうことは、勝つために大切な要素である。しかし、苦しい状況のときには、自分がプレーするだけで精いっぱいとなる。そんな時、誰かが声を出してくれるだろうと思いき、誰かが声を出せば自分一人出さなくても大丈夫だという考えになることがある。

お互いに声を出し合う状況はチームにとって最も望ましいことである。A選手の苦しくても声を出す状況は、B選手にとって、A選手に声を出すことを任せて休むことができるので得をすることになる。A選手は声を出し続けて苦しい状況が続き、次のパフォーマンスに影響を与え、自分だけ損をしたということになる。また、A選手とB選手の選択が逆のパターンもあり、その場合は損得も同じようになる。逆に二人とも苦しいからといって声を出さなければ、チームの利得は最低になり最も望ましくない結果をもたらす。

A選手、B選手ともにどちらかが声を出して、自分が休むという「裏切り」の選択をすれば自分が得をするということをお互いに知っている。だから、苦しい状況に直面すると、チームのために声を出すか、出さないで楽をするかのジレンマに陥る。お互いに「協力」を選択をすれば、そこそいい結果になることはわかっているのに。

「囚人のジレンマ」と呼ばれるこの話は、ゲーム理論の分野で研究されるシナリオの中で最も有名な話である。囚人のジレンマは、自己の利益ばかり追求するのは、いかに合理的だろうと、自分にとっても他の人にとっても最善の結果にならない場合があるため、協力することが最良の方針となることを教えてくれている。

皆でよくなるために、皆でやるチーム「共同体」において、皆でよくなるためにやっていることで損得を言っちゃおしまい。何ごとも「皆が良くなれば、私も良くなる」である。